

2024（令和6）年度

知識集約型社会を支える人材育成事業

# クロスディシプリン研究紀要



# 目 次

巻頭序言 .....	1
------------	---

## 1. 紀要論文

(1) 学融合（クロスディシプリン）教育の改革 .....	2
(2) 地域創生とクロスディシプリン .....	8
(3) 表現学とクロスディシプリン .....	11
(4) 学融合（クロスディシプリン）教育における概念整理 .....	14

## 2. 調査結果

(1) 学融合ゼミナール I・II 「研究成果」(仏教学科).....	18
(2) 学融合ゼミナール I・II 「研究成果」(人間科学科).....	20
(3) 学融合ゼミナール I・II 「研究成果」(社会福祉学科).....	21
(4) 学融合ゼミナール I・II 「研究成果」(人文学科).....	22
(5) 学融合ゼミナール I・II 「研究成果」(日本文学科).....	24
(6) 学融合ゼミナール I・II 「研究成果」(歴史学科).....	26
(7) 学融合ゼミナール I・II 「研究成果」(表現文化学科).....	27
(8) 学融合ゼミナール I・II 「研究成果」(公共政策学科).....	28

---

## 巻頭序言



大正大学 学長

### 神達 知純

Society5.0 社会が到来すると言われている。最先端のテクノロジーによって経済発展や社会課題の解決が期待されるという。サイバー空間とフィジカル空間が高度に融合する社会はにわかに想像し難いが、AIの急速な進化を目の当たりにするにつれ、そのような時代が遠くない将来に実現するようにも感じられる。私たちが生きるこの時代はまさに変革の只中にあるのだろう。

大正大学では、コロナ流行期の2020年より「新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業」に取り組んできた。当事業は文部科学省の2020年度「知識集約型社会を支える人材育成事業」に採択され、今年度で最終年度を迎える。

「知識集約型社会を支える人材育成事業」の意図について、文部科学省は次のように説明している。「Society5.0時代に向け、全学横断的な改革の循環を生み出すシステム—全学的な教学マネジメント体制の確立、管理運営体制の強化や社会とのインタラクションの強化など—の学内における形成を実現しつつ、今後の社会や学術の新たな変化や展開に対して柔軟に対応しうる能力を有する幅広い教養と深い専門性を両立した人材を育成することを目的とした事業である」。

本事業は、本学が強みとする地域連携・産学協創を活かしながら、現代社会の課題解決に資する人材の育成を目標としている。学融合教育については、「幅広い教養と深い専門性を両立した人材」とあるように、自らが所属する学科の専門領域だけではなく、他分野にも関心をもち、それらの学びを統合すること（学融合）を目標のひとつとした。そのため各学科に「学融合ゼミナール」を開講し、学生たちが他学科の専門領域に触れることで、複眼的な視野を得ることをめざしてきた。いくつかの課題はあるものの、他分野に対する学生の関心を喚起した点において開講の意義はあった。また、2024年度より、幅広い知識を学べるようにより自由度が高く、実践性のある授業を設け、学生たちが選択できるように改編した。学融合教育に加えて、データサイエンス教育やアントレプレナーシップ育成教育も本事業の取組みとして実施しており、今後の成果を期待されるところである。引き続き学科の枠を超えた学びの交流が活発になることを期待したい。

# 学融合（クロスディシプリン）教育の改革

学長補佐・教務部長  
クロスディシプリン教育チーム長

小林 伸二

## はじめに

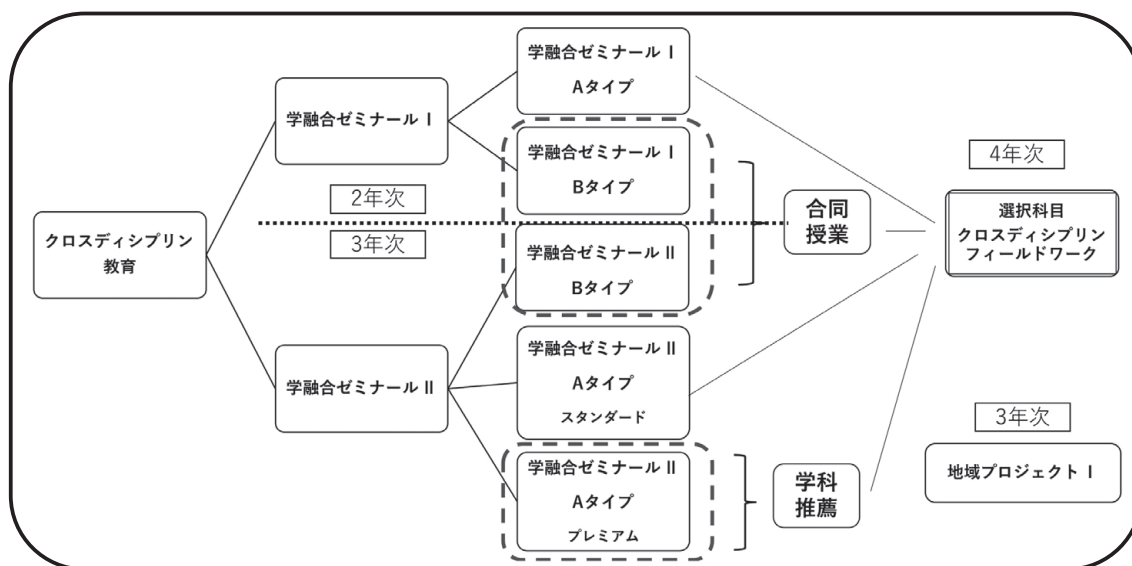
大学教育再生戦略推進費「知識集約型社会を支える人材育成事業」の文理横断・学修の幅を広げる教育プログラムとして「新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業」が採択され、クロスディシプリン教育の一環として全学必修科目「学融合ゼミナール」を開講した（小林伸二 2023）。その後、昨年度の日本学術振興会の委員現地視察の提言・助言、PO フォロワーアップ報告書、学生の授業評価アンケート、学内諸会議の議論を踏まえ、令和6年度に授業改革を行った。

本小論では大正大学におけるクロスディシプリン教育、第Ⅱ類科目「学融合ゼミナール」の改革の一端と、今後考えられる学融合教育のありかたについて若干の展望を示すものである。

## 1 「学融合ゼミナール」の改革

「学融合ゼミナールⅠ」（2年春学期＝1QT・2QT 開講 14回）、「学融合ゼミナールⅡ」（3年春学期＝1QT・2QT 開講 14回）の枠組みのなかで、改善策を講じた。学融合教育の全体像は以下の通りである。本小論では「学融合ゼミナール」タイプAに限定して改革内容をまとめる。

※学融合ゼミナール 履修年とタイプ



「学融合ゼミナールⅠ」では、昨年同様、学科 cross を前提に展開し、学科専任による第1～5回の「学科パート」、cross 学科専任による第6～9回の「横断パート」、プレゼン、レポート作成のための学科専任の第11～14回の「学科パート」に、第10回「混合パート」を新たに設け、

「学科パート」と「横断パート」のふり返しを行った。「混合パート」の運営は cross2 学科混合クラス、すなわち A 学科と B 学科を合わせて混合 2 クラスを編成して、「学融合」の視点整理を目的としながら、学科の枠を超えたディスカッション、学生交流を可能とした。教員の専門性を前提に地域学、人文学の視点から、多面的・重層的な思考を獲得し、複眼的な視野を養う教育を行った。

#### ※学融合ゼミナール I

1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	11回	12回	13回	14回
← 学科パート →					← 横断パート →				混合パート	← 学科パート →			

「学融合ゼミナール II」に関しては、スタンダード「探究する学融合」とプレミアム「旅する学融合」の 2 つの選択肢を用意し、学生の自主的な学びのための選択肢を増やした。

スタンダード「探究する学融合」は、学科専任による第 1～5 回、第 11～14 回の「学科パート」の間に、学生が選択する第 6～10 回の「学融合パート」を設置し、自己の学融合に基づき各研究領域から自由に授業を選択し、学科を超えた学融合（マイ・クロスディシプリン）の実現が可能となった。「学融合パート」では、教員の専門性を前提に現代社会、人間学の視点から現代社会の課題を解決する力を養う教育を目指した。

#### ※学融合ゼミナール II スタンダード「探究する学融合」

1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	11回	12回	13回	14回
← 学科パート →					← 学融合パート →				← 学科パート →				

#### ※資料 「学融合パート一覧」

第6回	「揭示物と情報」 「現代社会の文化的多様性：生殖政策をめぐる問題」 「墓の歴史と課題」 「精神医学と人権」 「社会学理論の視点からみた現代社会」 「ハンセン病への差別と偏見」 「小さな共創的实践から社会を変革する—社会デザインの視点」 「地域運営の視点からみた現代社会の公共（公共性）について」
第7回	「伝達文書とわかりやすさ」 「物語から考えるジェンダー・公共性・モラル」 「中世京都の人々と社会」 「積極的傾聴とは」 「記憶の社会学の視点からみた現代社会」 「精神障害のある人と文学」 「地域創生のプレイヤーとして事実からものごとを考える」 「外国人の就労という視点からみた現代社会の公共（公共性）について」
第8回	「日本の在留外国人の目線から考える街中の表示」 「地域活性化における理論と実践について」 「近世庶民の行楽」 「積極的傾聴とは」 「実験心理学の視点からみた現代社会」 「ヒューマンライブラリーを企画しよう」 「地域通貨による地域創生：地域通貨ゲームを用いた考察」 「男女共同参画の視点から考える現代社会の公共（公共性）について」

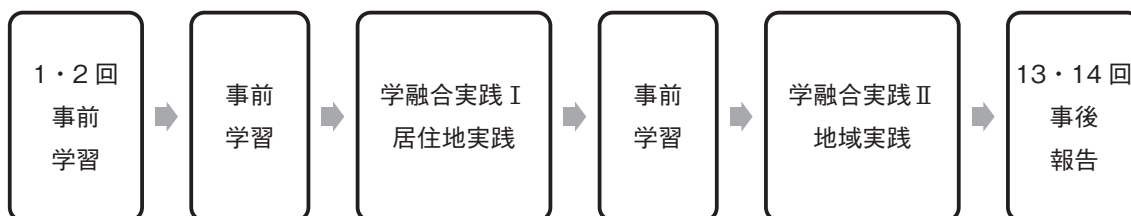
第9回	「やさしい日本語」と言語権 「言葉づかいを考える：言語コミュニケーションの可能性」 「地域の文化財としての近代建築」 「臨床心理学における情報伝達のしくみ（ベアワークを含む）」 「イノヴェーションと現代社会」 「まちで障害のある人と出会ったら」 「インタビューやロコミの言葉分析する新たな手法：テキストマイニング入門」 「観光政策の視点からみた現代社会の公共（公共性）について」
第10回	「ノンネイティブ・スピーカーの日本語力向上を助ける」 「理想のセクシュアリティ教育について考える」 「果物の近代」 「臨床心理学における子育て支援」 「社会学の視点からみた現代社会」 「地域共生社会を実現するためには」 「自治体広報の現在地」 「宗教学の視点からみた現代社会の公共性について」

プレミアム「旅する学融合」では、学科推薦学生を対象に、学科の学びを超えた自身の学融合、セルフ・クロスディシプリンを居住地域と全国地域のフィールドで実践することとした。第1～2回の事前学修と第13～14回の成果報告の間に、実践地を居住地域の3カ所（学融合実践1）と全国の連携自治体等から2地域を選択して4泊5日で自身の学びを実践し（学融合実践2）、当該期間の授業はオンデマンドでの対応となった。なかでも、後半の選択2地域では、居住地域での実践を踏まえ、地域間の特質を前提とした、「現代社会の課題」に応える力の醸成を求めた。

※「学融合ゼミナールⅡ」プレミアム「旅する学融合」

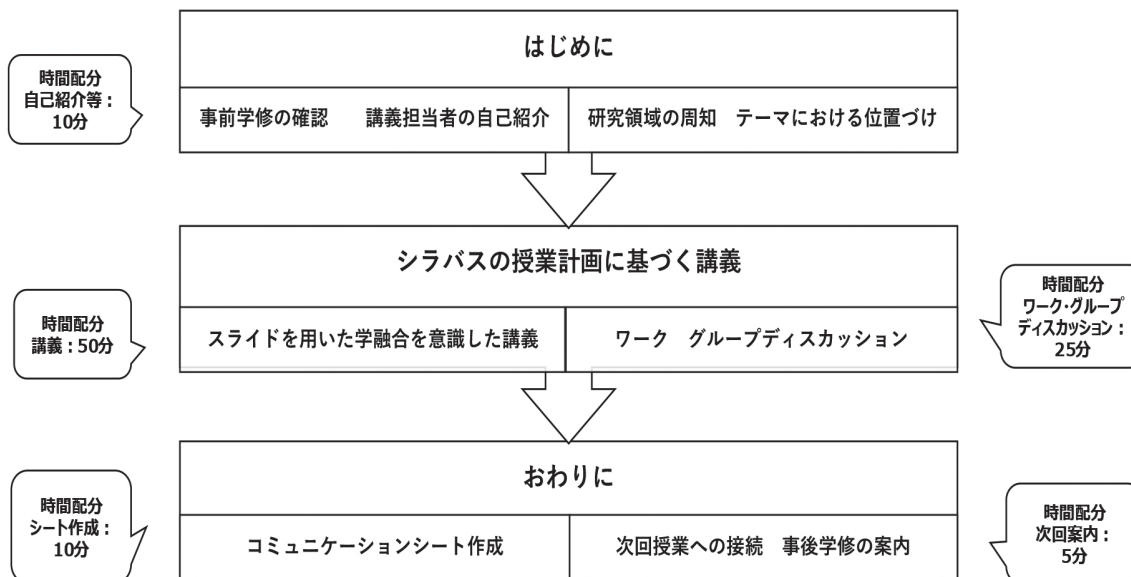
1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	11回	12回	13回	14回
事前授業		← 学融合実践1 →					← 学融合実践2 →					事後授業	

※「旅する学融合」実践スケジュール



こうした授業展開にあって、ゼミナールとはいえ実態は多数の学生に対する講義とワークが中心のため、自ずと授業運営には工夫が求められた。異なる学びの共有と交渉を通じて cross 領域の形成を目指し、クロスディシプリンに関する「態度と好奇心の重要性」を注視しながらリフレクションを行い、コーディネーターによる学融合支援のもと、「学融合知」をめぐる「理論」と「実践」に向けた学生同士の交流を行った。具体的には LMS (UR-note) を活用した事前学修、ワーク、アクティブ・ラーニング、チャットによる交流、学修成果の可視化の推進、講義とワークのくり返しを、タイムテーブルに示し奨励した。

※授業タイムテーブル



以上の改革を通じて、Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類の連携のもと、本学独自の全学必修のクロスディシプリン教育を、学科の枠を超え、多様な選択肢の提供により専門分野と他領域を統合的に学ぶ機会とした。「学融合ゼミナール」は多面的・重層的な思考の獲得を目指し、現代社会の課題に応える、地域戦略人材の育成に資するプログラムとして機能したと考えられる。こうした点は、学生が学科の枠を超え交流し、異分野の理解を通じた知識創生に向かう姿勢のみならず、教員もまた教員間の連携、テーマに接近する専門分野の柔軟性が生まれた。加えて、サポートの職員と連携した教育を通じて、全学・教職一体となった教学の新たな方向性にも影響した。これは、あるべき大学教育の方向性を示したものと自負している。

しかしながら、いまだ学生の専門領域における他分野との融合は「理論」をもとに他専攻の学生との交流を通じた、いわば認識レベルで止まっており、必ずしも「実践」として明確な成果を表しているとはいえない。現代社会に対して専門分野と他領域を統合的に学ぶ、学生同士がともに課題に取り組む体制支援の強化が求められよう。さらに、第Ⅱ類科目としての「学融合ゼミナール」を通して、専門分野の研究手法を現代社会の課題解決に援用させ、その体験や知見を専門の学びに還元することで、専門性をより深める教育の構築も必要であろう。学融合が目指すところの「学び」の提供には、クロスディシプリンが単なるかけ合わせや興味の喚起に止まらず、真の異分野融合による知識創生として、今後本学が目指す文理融合、旅する大学に対し、新しい教育効果を創出できるかが課題である。そのためにも、連携自治体及びエリアキャンパスを中心とした全国の地域で、クロスディシプリンの視点から地域社会が抱える諸問題に対して仮説を立て取り組む、行動力（実践）の機会の創出が求められよう。

## 2 学融合の今後

大正大学における学融合（クロスディシプリン）教育の改革について、「学融合ゼミナール」の改善点を示したが、第Ⅱ類科目として専門科目との関係のなか、今後どのような位置づけが可能であろうか。Society 5.0 時代、デジタル革新等に対して大学教育の改革が求められるように、常に社会の変化、産業界の要請に応えながら、その重要度は増すものと考えられる(1)。したがって、研究領域のかけ合わせ、融合する研究成果を教育として、なかでも具体的に授業にどう反映させるのか、現時点で整理することも無意味ではないと考えられる。学融合の今後のありかたについて若干の展望を示すものである。

経済史は歴史学か経済学か、という議論がかなり以前に存在した(増淵龍夫 1983)。専門領域における研究のアプローチに係る問題ではあるが、今であれば学融合の視点に接近する議論といえるかもしれない。実は歴史学をめぐる学融合は、今でもかつてと同様に不明瞭な点があるように思われる。これに対して地域を考えると、川の変遷と居住地、すなわち地理学的アプローチと、幕藩体制から廃藩置県、都道府県という歴史学の視点が重要だといわれており(山下祐介 2020)、地域学には地理学と歴史学の研究視点が不可欠となる。学生は「地域学」の授業を通じて、「地域」を異なる2つの分野の統合として捉え、地理学と歴史学のクロスディシプリンにより、地域に関して新たな気づきを獲得できるわけである。しかし、歴史学の学融合はそう簡単ではないと考えられる。歴史学には前述のような各時代、各地域の経済活動の歴史すなわち経済史のほか、それぞれの王朝の官僚制に関わる政治制度史、中央集権や刑罰に焦点を当てた法をテーマとする法制史、さらには時代を特徴付ける多様な文化の歴史など、他分野と

の融合が多岐にわたる。確かに、歴史学には歴史地理学という研究領域があり、歴史学と地理学の双方を結び付け、現代社会に生きる人々の課題を把握し、有効な解決策を考案して、それを実行するために役立つ方向性が存在する（矢田勝 2022）。だが、一方で歴史学以外の研究領域での学融合として、「〇〇の歴史」、「△△の歴史」と称することは、歴史学と当該領域の安易な融合といった印象は否めないように思える。歴史学は、批判と分析を通じた史料講読にもとづき、研究史を精査し時代相を明らかにする営みが不可欠であり（山本博文 2017）、簡単に取り入れるのは難しいといえる。「〇〇の歴史」、「△△の歴史」では、いったい如何なる授業がなされているのであろうか。確かに文理融合教育では、総合大学の「総合科目」で、個人ワーク、グループ議論を通じた授業の事例、内容について参考にすべき試みがなされ、一定の成果が認められる（木村元 2024）。ただ、大正大学での学生のアンケートからは（2）、学生自身が他学科の学生との交流、他学科の学生との学びに、興味があることがわかった。所属学科の学びとは異なる領域、特に専門を異にする学生とのディスカッションを通じた、「学融合ゼミナール」を求めているのである。こうした点で、本学の進める学科 cross を前提としたクロスディシプリン教育、そこに学生の選択の自由を盛り込む融合教育「学融合ゼミナール」は、学生満足度、学習者本位の「学び」を実現するために、一定の方向性を大学教育に示しているといえるのではないだろうか。マイ・クロスディシプリン、セルフ・クロスディシプリンは学生自身の問題意識のもと、専門領域を超えた現代社会の課題への入り口となり得るといえよう。

学生の興味が単なる喚起に止まらず専門と領域との真の異分野融合となるためにも、クロスディシプリン教育の授業においては、教員同士の交流の活発化も不可欠である。毎回異なる教員が担当する枠組みを前提としながら、教員交流を通じた展開があることが理想的と考えられる。学生交流のみならず、教員の全学的交流・交渉の上に、単なる専門合わせの講義ではなく研究領域の相互理解による真のクロスディシプリンのあるべき姿を示すべきであろう。例えば、歴史学科の授業で経済史をテーマにするのであれば、歴史研究者からの経済の歴史、経済研究者からの経済の歴史という、異なる分野を専門とする研究者が「経済史」という共通項をどう考えどう伝えるかという、人間力に基づく研究者 cross が真の学融合となるわけである。開講にあたって各回のオムニバスのみならず、1回の授業を複数の教員が担当し、学生が自由に選択できる学生・教員の総合的交流がクロスディシプリン教育の今後のあり方として有効であると考えられよう。そのためにも、教員の研究領域紹介やテーマの概要など、動画視聴等を通じた学生の事前学修とアクティブ・ラーニングによる知識（理論）の定着の促進を目指す授業が必要である。さらに、「学融合ゼミナール」で修得した「学融合知」をもとに、学生が自らプロデュースする実践的活動が生まれることが理想となろう。

## おわりに

以上、本年度大正大学で行われたクロスディシプリン教育、第Ⅱ類科目「学融合ゼミナール」の改革と改善、今後考えられる学融合教育の授業のありかたについて若干の見解を示した。学融合の現場での困難さは、各大学が抱える問題であり、改善が語られている（寺田徹 2014）。ただ「学融合」自体、学生の学びを超えた異分野の融合であるという点からすれば、まず何が「学融合」なのか、どうしてこれからの社会で異分野の融合が必要か、その理論を実践に移すことの重要性、地域戦略人材にどうつながるかなど、学生への「意識」付けがあらためて課題と



して浮上してくる。そもそも、意識の働きには知性的・感情的・意志的の3つの側面があり、このうち意志が凡ての意識の原型とされ、動機の具体化として得られる結果の概念が目的としての意識であったといわれる（藤田正勝 2022）。こうした点から教育における「意識」付けは、授業を展開する上で最も重視すべきであり、「学融合」においてもこの「意識」の醸成が求められよう。既存の知識の再確認、未だ知らない事項に対する理解、そして新たな世界への挑戦は、すべてこの「意識」付けが左右するものと考えられる。「学融合」授業の「意識」付けにより、現代社会を見つめ、問題点を自分の視点で解釈し、解決策を学生交流やグループディスカッションから協働で生み出して実行する、学習者本位の教育を行う必要がある。

## 註

- (1) 今後の大学教育の振興方策について 参考資料集 令和5年1月25日版 文部科学省 2023  
<https://www.mext.go.jp/kaigisiryoo/content/000212170.pdf>  
文理横断・文理融合教育の推進について（審議経過メモ）文部科学省 2022  
[https://www.mext.go.jp/.../20220921-mxt\\_koutou01-000025134\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/.../20220921-mxt_koutou01-000025134_3.pdf)
- (2) 2024年春学期および第1・第2クォーター、授業評価アンケート  
学融合ゼミナールⅡ（タイプA）受講終了時アンケート

## 参考文献

- 木村 元 2024「文理融合教育のあり方についての一考察 —9つの学部からなる総合大学における「総合科目」の実践から—」『富山大学教養教育院紀要』5
- 小林 伸二 2023「クロスディシプリン教育と「学融合ゼミナール」」『クロスディシプリン教育紀要』
- 寺田 徹 2014「学融合と農村計画教育」『農村計画学会誌』33—2
- 藤田 正勝 2022『西田幾多郎『善の研究』を読む』筑摩書房
- 増淵 龍夫 1983『歴史家の同時代史的考察について』岩波書店
- 矢田 勝 2022「地域史探求の方法：現代の地域課題から出発する歴史地理学という観点」『静岡歴史教育研究会成果報告書』
- 山下 祐介 2020『地域学をはじめよう』岩波書店
- 山本 博文 2017『歴史の勉強法』新潮社

---

---

# 地域創生とクロスディシプリン

地域創生学部 地域創生学科  
准教授

大橋 重子

本学では、「地域戦略人材」の育成を目指す取り組みを進めている。その一つが学融合・学際的教育である。本稿では、この学融合教育の取り組みに注目し、開始から約3年が経過した振り返りも含め、地域創生におけるクロスディシプリンの有用性と課題について検討する。

地域創生は社会課題であり、課題解決の方法は一つではない。そのため、地域創生を学ぶことができる大学の取り組みにもさまざまな形があり、学科も多岐に渡る。また、学際的な特徴を持った地域創生に関わる学科では、異なる分野の知識が融合することで地域特有の複雑な問題に対して多角的にアプローチする力が求められる。例えば、地域経済の再生と環境保護が同時に考慮されることによって持続可能な地域発展の実現に寄与する可能性が高まる、といった視点である。そのため、地域理解を深めるフィールドワークだけではなく、その活動にどのような形で理論や概念を結びつけて思考する力を養うことができるかが重要な意味を持つ。このような特徴を持つ地域創生を学ぶ学科として、本学の地域創生学科は2016年に設立された当初から、経済学や経営学を中心に、幅広い専門分野から教育や研究ができる環境を整え、学生自身が地域創生について多角的な視点を身につける学修機会を提供している。

異なる学問分野（ディシプリン）での知識の共有や協働を意味するクロスディシプリンは、一つの分野に閉じこもらず、他分野の知識や方法を応用して新しい知見や解決策を生み出すことを目指している。具体的には、異なる学問分野の専門家が連携して行う研究や、ある分野の概念や手法の他の分野への応用である。本学では、複数の分野・領域であるディシプリン間の連携や交流、融合によって異なる分野の専門知識を横断的に捉え、新たな知として形にする力を育成する教育（小林, 2023）と定義をして、クロスディシプリン教育を実施している。

このように地域創生とクロスディシプリンは高い親和性をもっているが、全学共通の必修科目として学科を超えての講義を体系的に運営することは容易ではない。そのため、本稿では地域創生学科の学生を対象として、クロスディシプリン教育の共通科目である「学融合ゼミナールⅠ」での学びを紹介する。その上で、学科横断型の科目から見てきた現状と課題を整理する。他学科の学問領域からの学びを通して、どのように地域創生を理解し、研究課題を探索するプロセスに発展させているのかを把握した上で、今後の学修に効果的なプログラムについて検討を行う。

2年次の必修科目である「学融合ゼミナールⅠ」は、学科カリキュラムの履修「縦の学び」と学科を超えた領域横断的「横の学び」による専門教育を基本として構成され、自専攻とは異なる専門領域の学びから多面的・重層的な思考を獲得し、複眼的な視野を養うことを目的としている<sup>1</sup>。地域創生学科では、開講当初から歴史学科とのクロスディシプリン教育を行っている。地域創生という文脈において歴史的な視点は重要な意味を持つが、歴史学の専門教員から直接講義を受ける機会は貴重な経験となる。しかし、学生自身の認識には差があるため、その意味

---

<sup>1</sup> 大正大学におけるクロスディシプリン教育のひとつ「学融合ゼミナール」については、小林（2023）が詳しい。

づけについては第1回目のガイダンスで丁寧に説明することを心掛けている。また、同学年では、夏休み明けの第3クォーターから、1か所2週間を2か所、計4週間の地域実習が行われる。本講義を受講している期間は、自らの問題意識を明確にしながら実習地を決定する時期とも重複する。そのため、初回の講義では卒業までのロードマップを示し、地域実習に向けて各自がリサーチ・クエスチョンを設定するためにも役立てるように意識づけをしている。さらに、個人での活動となる3年次の実習地の選択や研究テーマの設定、最終的には卒業論文執筆に向けた研究課題を探索することにも、学融合での学びを活用することができるような内容を含む講義を行っている。

次に最終課題であるアカデミックエッセイから、「横の学び」に関する効果を検討していく。全14回のうち歴史学科の教員による講義は4回あり、その後、2学科の学生が合同で行うディスカッションが設定されている。この学科横断での学びについての記述に注目し抜粋した結果は、以下の通りである。

他学科の教員による講義から研究対象の違いに目を向けた、「地域創生学科は常にフィールドとその未来を研究し、過去の歴史に目を向けることもあるが明らかにする対象は地域が目標とする未来である。一方で、歴史学科は常に知られざる過去の研究を行う。」といった記載があった。また、「歴史学のイメージは『歴史を学ぶ、だったが』歴史を知る、という表現の方が適していると感じた。歴史を知ることには、現状と将来的な展望を考える視点があった。」「過去だけが歴史だと感じていたが、今の私たちの生活に存在している物や建物、概念や教えは長い間培われた歴史であり、これからもそれが歴史として刻まれていくことに気づいた。」など、学科でのレポートでは出てこない発見が綴られていた。

他領域を専門に学ぶ学生との意見交換も、学生にとっては刺激を受ける機会になっている。実際に2学科の学生が混合して実施するディスカッションでは、文化財や寺院からどのような役割を持つ土地だったのかが当時の社会状況や人々の心情まで写し出していることを読み解く視点や、常に知られざる過去の研究を行うため資料も場合によってはないことを歴史学科の学生の話から知り、視点や研究方法の違いを認識するなど、学科の特性について改めて考えるきっかけになったと言う。これらのコメントからは、学科を超えてのディスカッションが学生自身の振り返りや、新たな気づきの機会として有効に機能していることが読み取れる。

3年間の実践を通して見えてきた課題は、次の2点である。1つ目は、14回の講義時間に学科パート、横断パート、ディスカッション、プレゼンテーションなど盛りだくさんの設定になっている点である。特にプレゼンテーションは、学生の人数から授業内に実施することが難しく、動画の視聴やグループでの評価という形を取らざるを得ないため、本来のプレゼンテーションの意義を十分に得られていない可能性がある。2つ目は、学科パートの位置付けである。学科内には、オムニバス形式で地域創生について学ぶ専門科目が設定されているため、「学融合ゼミナールI」との差別化を図る難しさがある。

これら2つの課題については、効果として現れている学生の気づきや考察から検討することが有効だと考える。クロスディシプリンとは、他分野の知識や方法を応用して新しい知見や解決策を生み出すことを目指している。この点において、先に挙げた学生のコメントは十分に成果を生み出している。クロスディシプリンの意義から見ても、詰め込むのではなく、横断パートとディスカッションを上手く組み合わせて、学生の探究心を養う設定にするなどの調整が必要ではないだろうか。また、「縦の学び」についても改めて考えていきたい。

本稿では、開始から約3年が経過した学科横断型の科目である「学融合ゼミナールⅠ」の事例を用いて、振り返りを行い、地域創生におけるクロスディシプリンの有用性と課題について検討してきた。その結果、学際性が豊かな地域創生学科での学修環境下にあっても、学科を超えた学びには、学生にとって気づきや新たな知見を見出す効果があることが確認された。今後は、全学において見えてきた成果や課題を共有し、さらに有効な学びの機会を提供していくことが望まれる。

#### **参考文献**

小林伸二（2023）「クロスディシプリン教育と『学融合ゼミナール』」, 『2023（令和5）年度 クロスディシプリン研究紀要』, p.2 - 5.

---

---

# 表現学とクロスディシプリン

表現学部 表現文化学科  
専任講師

## ヨシムラ ヒロム

表現学部では仏教学部と共にゼミナールを運営・実施した。学融合ゼミナールⅠ、Ⅱともに表現学部側は、前者はヨシムラヒロム、後者は影山裕樹が担当し、学融合ゼミナールⅠ、Ⅱともに2回ずつ仲俣暁生も講義を行なった。

2つの学部が混じり合う学融合ゼミナールでは、表現学部と仏教学部の特性が重なり合うことを重要視した。表現側の3名は、ヨシムラ・影山が街文化プランニング/ライフデザインコース、仲俣は情報文化デザインコースに所属し、ともにそれぞれの分野と仏教を照らし合わせ、表現学部の教員の特質を活かした講義を展開した。

学融合ゼミナールⅠでは数多ある仏教の要素から信仰心というテーマを選択し、担当教員の専門である大衆文化と合わせた「表現から生まれる信仰」、現在の〈推し文化〉を取り上げた。現在の学生のほとんどが推しを持っており、それは信仰のようなものであることが理由である。その信仰のカタチは、幼い頃から対象の推しがあることが当然といった文化で醸成されたものであり、大人世代からすると独特に映る。推しへの信心の高さが自己主張へとつながり、推す自分を愛でることを発端とする自己愛といった側面も保持する。また幼少期から推しという要素があるため、それを検証するフェーズに欠けている点も興味深い。大学生との対話で判明した意外な事実ではあるが、推す対象が持っている背景、文化を知らないことは多々ある。推しに対する不快感を得ないために、遠ざける面を持つ。よって信じることの力の強さと怖さを自覚して欲しいといった思いも込め、推しとなる対象を深く知ることの必要性を説いた。

毎回の講義では、現在の表現文化に大きな影響を与えた著名人を一人ずつ紹介。松本人志、北野武、手塚治虫、鈴木敏夫など、学生がリアルタイムで影響を受けている人物に影響を与えたカリスマを多く取り上げる。彼らがどのようにカリスマを形成していったかを生地、生まれ育った土地、家族、環境、趣味嗜好など様々な角度から検証し、一般人から推しの対象となっていく過程を丁寧に紐解く。特に推しという信仰心を生み出す場所、都市、土地、土壌については深く言及し、地域に根付く文化の実例を提示していった。関西のコミュニケーション、東京における大衆文化、東西の貸本漫画事情、名古屋人の商才など紋切り型ではあるが、著名人のパーソナリティを見せることに意義があったと思う。

写真、動画もふんだんに使い、対象となる著名人を知らない学生も理解できる内容にするよう留意した。表現文化の講師が担当することから、著名人が生み出した代表作も提示し、作品が生み出された時代における革新性も伝えた。全ての講義で学生にレポートを提出させた。講義内容は概ね好評で学生からは、「自分の推しが影響を受けた人を知れたことが良かった」「昭和という時代性が理解できた」「無闇に推すだけではいけないと思った」など、コチラが意図したことを伝えることができた。

学融合ゼミナールⅡでは、〈「まちづくり」と寺院の関係〉について考える授業を展開した。担当する影山の専門が「まちづくり」のため、まずは「まちづくり」についてレクチャーした。

現代の「まちづくり」は国や大企業によるトップダウンの都市計画ではなく、市民が協働するボトムアップで行われることが主流になっているという話をしたうえで、地域にある様々な団体や施設が協働する事例を紹介した。

もともと町とは門前町という呼称に表されるように、有力な寺院の門前に形成されたもので、室町時代以降、参詣者が集まり賑わう門前町が成立した。2年次に展開する「推し」のように人々を魅了する存在としてかつての寺院があり、それによって門前町が形成され、人々が集まり、賑わい、町を作り、文化や経済を回し、現在の高尾や成田や川崎大師があるわけで、学融合において大変興味深い連結事案となる。

そうしたなかで、地域における寺院のユニークな取り組みが全国で盛んになってきている事例を挙げた。檀家の減少という課題がある一方、地域内には世代や属性を越境した「出会い」を生み出す場が減少しているという社会的な課題がある。そういった問題に対し、寺院が果たす役割を解説した。境内を使って音楽フェスやサウナイベント、マルシェ、プロジェクションマッピング、美術展を行う寺院や、地域福祉の場として、お年寄りや障がいのある方が訪れたり利用する場として開いている事例を紹介した。

こうした型破りな寺院が増えていくなかで、どのように檀家や観光客以外に寺院を開いていけばいいか、悩んでいるところも少なくない。そういう意味では、表現学部の学生が学んでいるクリエイティブなスキルが役に立つことも示した。学生時代につながりを持っておけば、将来クリエイティブ系の仕事についている同級生に「依頼」することも可能だ。クリエイティブの仕事において重要なのはデザインのスキルや美的センスではなく、実は、「依頼するちから」であるということを示した。

どこに、どんなクリエイターが存在するか。彼らはいくらで仕事を請け負ってくれるのか。どんなクリエイターがいれば、理想通りのイベントを開催することができるか。そうした脳内のマップが「資産」であり、その資産をいかすためのアイデアを課題として提出させた。提出物のなかで「お寺×撮影会」というアイデアを出した学生もいた。お寺という非日常の空間を、たとえばコスプレイヤーの撮影の場として開いてみてはどうか。普通の撮影スタジオを使うより安価で、かつSNS映えもするため、お寺を開く上では格好のアイデアだろう。

他には寺院でクリエイティブなイベントをするために、ユーザーの体験全体を考えて見ようという課題を与えた。「SNSで発見→HPを見る→おとずれる→リピーターになる」などの一連のプロセスである。こうしたプロセスを考えさせることは、将来、寺院の経営に携わる仏教学部の学生にとっても、また将来、さまざまなクライアントと仕事をするようになる表現学部の学生にとっても、役に立つと考えられる。

仲俣が担当した学融合ゼミナールⅠでは、「街と雑誌の深い関係」を講義した。「雑誌」というメディアは雑多な要素が「編集」されることで価値を生み出す。同様に、現実の街（都市）もそこに様々な文化的雑多性があることで価値が生まれる。この両者がもつ本質的類似性について考えさせるため、雑誌の「黄金時代」ともいべき1970年代から、インターネットの普及以降の時代である2020年代までの雑誌カルチャーの変遷をたどりつつ、学生にも自身と街と雑誌との関係性や、そこに見られる類似性を考察するよう促した。とくに商業出版のメインストリームを紹介するだけでなく、傍流やオルタナティブとしての「ミニコミ」「ジン」などのメディアに着目し、そこで生まれているコミュニケーションのあり方自体が「都市的」なものであることの気づきを学生が得られるよう工夫した。またデジタルネットワーク時代にあっ

でも印刷メディアの役割が完全に消えるわけではなく、ウェブやSNSなどのデジタルメディアと、リトルプレスやジンとの相性の良さを伝えたいうえで、「街」や「メディア」に対して受け身の消費者としてとどまるだけでなく、自らが発信者となることへの意欲を掻き立てるような具体的な事例の紹介に努めた。

同じく中俣が担当した学融合ゼミナールⅡでは、「寺のある街」を取材して記事を編集した。エリア内に寺社をもつコミュニティには歴史的に構築されてきた様々な文化的遺産が存在する。京都や奈良のような古代からの伝統をもつ都市だけでなく、東京近郊など、近世以後に都市形成が進んだ場所においても、寺社をもつ地域はおおきな役割を果たした。近代から現代にかけての都市文化の形成と寺社の関係も見落とすことはできない。このことを歴史や伝統、宗教といったものに深い関心をもたない学生に気づかせるため、「寺のある町」を具体的にひとつ選んで現地取材を行わせ、そのエリアがもつ特性について短いレポート記事を書かせる実践を行った。寺社と地域の関係は単に伝統的・宗教的なものだけではない。繁華街や「若者に人気の町」と呼ばれるようなエリアにも、多くの場合寺社が存在する。自分が親しみを感じているエリアにも寺社が存在すること、しかもその存在がそのエリアの価値を高めたり、文化形成の鍵になっていることに気づかせるよう、サブカルチャー的なコンテンツも許容しつつ事前のリサーチを入念に行わせ、現地取材との二段構えで実践を行うよう授業を設計した。

ここですべて再現はできないが、仏教学部と表現学部の学融合は、過去と現在と未来を照射するとともによい組み合わせであることがわかる。特に表現側が用意した、街文化・ライフデザインと出版文化は、表現学部と仏教学部の特性が重なり合うことを、そして興味深いクロスディシプリンの可能性を、可視化したのではないかと考える。

---

---

# 学融合(クロスディシプリン)教育における概念整理

## —学融合ゼミナールタイプB「アドバイス講座」実施による概念整理から—

クロスディシプリン教育チーム長 小林 伸二  
法人企画課 福中 裕之

大正大学(以下、「本学」という)は、令和2年に文部科学省の助成事業「知識集約型社会を支える人材育成事業」に応募し、「新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業(以下、「本事業」という)」が採択されることとなった。

本事業は、探究科目・データサイエンス・リーダーシップ・総合英語からなる第Ⅰ類科目、第Ⅱ類科目「学融合ゼミナール」、第Ⅲ類科目群である「アントレプレナーシップ育成教育」を履修することによって、Society5.0時代に向けて、多面的な性質をもつ地域の課題解決のため異なる専門分野の多様な人材を統合し、調整することができる人材を育成することを目的としている。

本事業の採択にあたり、本学の全学科の専門科目である第Ⅱ類科目に「学融合ゼミナールⅠ・Ⅱ」の4単位を位置づけ、各学科の学位授与方針の「思考力・判断力・表現力」に「知識集約型社会を見据えて、自らの専門分野の学問領域と他の学問領域を統合的に学び、多面的・重層的な思考をすることで、複雑で多様な現代社会の課題に応えることができる」という資質・能力を増補し、新たなカリキュラムを開始することとした。

そして令和4年度より学融合ゼミナールが開始され、全学生が学融合ゼミナールを必修科目として履修する運びとなった。学融合ゼミナールは2年次・3年次の第1・第2クォーターに履修することとなり、異なる学科の教員による授業により、他学科の教育内容を学び、グループワークやプレゼンテーション、アカデミックエッセーの作成を通じて、他領域と自身の学科の専門科目を融合させる教育内容としている。

学融合ゼミナールを履修することにより、異なる分野の理論と概念を組み合わせることで総合的な学びを実現することができ、複雑な問題に対して複数の視点から解決策を探究する力を得られる。そして自らの強みを発見し多様なキャリアパスを模索することや、興味や関心を強みに、思考力を発達させることができる等の効果を期待している。これは、地域戦略人材育成のための要素の一つである。

しかし、学生や日本学術振興会の知識集約型社会を支える人材事業委員会より、『決まった学科の組み合わせだけで「現代社会の課題」に応えているのか疑問が残る』、『授業内での他学科との学生との対話・交流も検討いただきたい』という意見があった<sup>1</sup>。そのため、令和6年度においては、学融合ゼミナールⅠにおいて「混合パート」という回を設け、他学科の学生との合同授業を実施し、他学科の学生とグループワークを行う授業を実施することとした。また、学融合ゼミナールⅡにおいては、学生が他学科の授業を選択することができるようにした。さらに、学融合ゼミナールタイプBという授業科目を新たに増設し、オンデマンドの授業と2

---

<sup>1</sup> 日本学術振興会令和5年度大正大学現地視察報告書、  
[https://www.jsps.go.jp/file/storage/j-chishiki/senteijoukyou/r5\\_chishiki-genchi\\_04.pdf](https://www.jsps.go.jp/file/storage/j-chishiki/senteijoukyou/r5_chishiki-genchi_04.pdf)、(2024.9.17)



つの選択テーマの授業を組み合わせ、学生の需要に応える授業を開始した。令和6年度における工夫により、学生の思考力等が向上することが予想される。

学融合ゼミナールタイプBについては、2年次・3年次の全学科の学生を対象としている。共通であるオンデマンドのパートに加えて、14のテーマから2つのテーマを選び、各テーマについてそれぞれの専門分野からの視点を取り入れ、学融合の意義や効果、学びの中の気付き、自身の専門・目標・成長等を踏まえて、社会への貢献（キャリア形成）について考察することを選択テーマの授業の最終的な課題とした。オンデマンドのパートについては、「大学とコミュニティの融合」「大学生に問いたい、これからの時代をどう生きるか」というテーマで、これからの社会と求められる能力・資質について気付きを与える講義を実施した。また、アドバイス講座を開講し、学融合が必要である社会的背景、求められる能力・資質、現代社会の課題、所属学科の学びとこれから求められる学び、異なる分野の学問と課題解決のためのテーマ、自身の中での学問と学融合の学びの融合、異なる視点・思考・リテラシーを育むことについて学習する講座を実施した。

クロスディシプリンチームでは、アドバイス講座作成にあたり、学融合教育とは何かということについて整理・確認を行った。その整理・確認について以下のとおり説明する。

#### (1) 知識集約型社会を支える人材育成事業

文部科学省の公募において、知識集約型社会を支える人材育成事業の公募要領には、①一般的な見方から事象の全体像を捉える力、②文系理系を越えた複数分野にわたる深い専門知から同時にアプローチできる力、③専門教育において、これからは知識の水準の高度化だけでなく、複雑・高度化する社会課題等に対し、複数分野にわたる深い専門知からアプローチできる力、以上の能力が求められるとある。

これらの能力は、知識集約型社会において複雑・高度化する社会課題や産業界における新しい事業開発など、既定の解き方が存在しない課題に対応していくため必要な能力であり、そのためには複数のディシプリン（学問の知識体系）や、あるいはそれぞれの基盤となる原理や思考のフレームワーク（以下、単に「ディシプリン」という）を理解・修得し、その修得した知識・スキルを実際の社会に適用することのできる能力を育成するカリキュラムを設ける必要があるとしている<sup>2</sup>。

つまり、これからの社会においては1つの専門分野の知識・技能だけでは不十分であり、複数の専門分野の知識体系を学ぶことや、それぞれの分野の原理や思考を身に付けることにより、物事を一面的ではなく多面的な見方で捉えて、課題解決に向けたアプローチをすることが求められるのである。このための教育内容や教育方法の拡充あるいは転換が大学には必要とされ、知識集約型社会を支える人材育成事業の公募要領における具体例としては、「養成する人材像を明確にした上で、主専攻における科目の見直しも併せて行いながら、複数の主専攻（ダブル・メジャー）や、主専攻・複数の副専攻（メジャー・マイナー）を通じて複数のディシプリンを身に付け、また学びのプロセスの中でそれぞれを関連させ、実社会に適用できる能力を培う教育プログラム」とある。複数のディシプリンを身に付けること、そして、学びのプロセスの中

<sup>2</sup> 日本学術振興会『令和2年度「知識集約型社会を支える人材育成事業」公募要領』、  
[https://www.jsps.go.jp/file/storage/j-chishiki/download/r2\\_chishiki-kouboyouryo.pdf](https://www.jsps.go.jp/file/storage/j-chishiki/download/r2_chishiki-kouboyouryo.pdf)、(2020.6.30)

でそれぞれを関連させることについてはどのようなことが必要であるのか、知識集約型社会を支える人材育成事業以外の指針等から概念を示す。

### (2) 日本経済団体連合会「採用と大学教育の未来に関する産学協議会中間とりまとめと共同提言」<sup>3</sup>

日本経済団体連合会では、「Society5.0時代に求められる人材および能力」について、リーダーシップ、失敗を恐れずに挑戦する姿勢、自己肯定感、忍耐力、他者と協働する力、新しいことを学び続ける力、変化を楽しむ力を前提とし、基礎学力・リテラシーを身に付けた上での論理的思考力と規範的判断力、課題発見・解決力、未来社会の構想・設計力が相互に関連するとある。論理的思考力と規範的判断力はリベラルアーツ教育を通じて涵養することとあり、九州大学共創学部、国際基督教大学の事例が挙げられている。九州大学共創学部は、人文科学・社会科学・自然科学を横断する課題解決型アプローチに重点を置いた教育を行っており、国際基督教大学は、シングルメジャー・ダブルメジャー・メジャー・マイナーという履修方式をとっている。

また、企業へのアンケートによると、特に期待する知識として、「文系・理系の枠を超えた知識・教養」が最も多く、リベラルアーツ教育や文理融合教育を重視した教育の実践が重要とある。さらに、Society 5.0において求められる知識・能力の整理として、人文科学、社会科学、自然科学の幅広い知識、高度専門職に必要な知識・技能、数理・データサイエンス・AIに関する知識、課題発見・解決力、論理的思考力と規範的判断力、未来社会の構想・設計力（創造力）、学び続ける力とある。

### (3) 文部科学省中央教育審議会大学分科会大学振興部会（第4回）会議資料「【資料3】文理横断・文理融合教育の推進について（審議経過メモ）」<sup>4</sup>

文部科学省中央教育審議会大学分科会大学振興部会によると、どの学問分野であっても各学問における固有の理論を深く学び、これに基づき仮説を立て、推論や実験・実証等によって解決や結論に至る方法を身に付けることなどを通じて課題発見・解決力等の修得につながるものが重要である。そして、哲学や数学の事例をあげて、多様化・複雑化が進む社会経済における課題を発見・解決のする力の基盤となる人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、物事の本質を捉える力の涵養に資することが重要であるとしている。

さらに、環境学の事例としては、環境をめぐる諸問題の解決に貢献できる人材の育成を目指す場合、地球温暖化をはじめとする様々な環境問題が発生するメカニズムや技術的な解決方法に関する自然科学的なアプローチとあわせて、人々の生活や分野、価値観を踏まえた経済システムの変更や政策立案を考える人文・社会科学的な素養や思考も必要となる。課題解決に必要な知識・技能として、デザイン思考やデータ分析、調査法等のアカデミックスキル、文理の別を問わず必要とされる汎用的なスキル・能力（例えば、アカデミックライティングやプレゼンテーション等の表現力、コミュニケーション力等の対人力）としている。

<sup>3</sup> <https://www.keidanren.or.jp/policy/2019/037.html>, 2019.4.22

<sup>4</sup> [https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/content/20220913-mxt\\_koutou01-000024995\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/content/20220913-mxt_koutou01-000024995_3.pdf), 2022.9.14

#### (4) 日本私立大学連盟「文理横断教育の実践と推進（中間報告）」<sup>5</sup>

「知的好奇心・探究心の涵養」や「実証科学に基づいた論理的思考力、規範的判断力の構築」のための、【修学姿勢】として主体性、多様性（革新性、異端性）や包摂性の涵養、【修学手法】としてニューメラシー、データ・リテラシーやデジタル・リテラシーに基づく科学的思考サイクル（仮説→データ収集・分析→検証→立論）の涵養を挙げている。

そして、「新たな時代、社会を担うために必要な力」として、問題発見力、課題設定力、俯瞰力、想像力、分析力、協働力や創造力等（【養成する力】）の涵養・強化を図っていく必要があるとしている。

#### (5) 終わりに

以上、行政や企業において求められる知識・能力・技能等を挙げた。学融合教育とは手段であり、異なる分野の知識を身に付けるだけではなく、意義や目的、学生自身の目標を明確にして、多面的な思考力・判断力・表現力を涵養していく教育方法も必要と言える。そのため、学融合ゼミナールタイプBでは、グループワークや個人ワークを重視した教育方法とするだけではなく、Society5.0時代に求められる能力・資質と学生自身の振り返りの機会も設けることとした。

寺田徹（2014）によると、学融合には「自分とは異なる分野の相手と対話し、互いの考えの相違を理解し、自らの専門領域と融合していくことが重要」と述べている。また、「ひたすら異分野の知識を取り込んだところで、そこに何かを創り上げるイメージがなければ、結局何も生まれてこない。やみくもな学融合は非生産的である。」<sup>6</sup>とも述べている。

このことから、今後の学融合教育を考えるにあたって、グループ学習におけるジグソー法の活用<sup>7</sup>等も効果的である。また、文部科学省中央教育審議会大学分科会大学振興部会の報告にあるとおり、仮説に基づくデータ収集、分析・検証や実証も学融合教育に求められることである。本学の学融合ゼミナールにおいては、アカデミックエッセーやレポートにおいて、生活課題・社会課題の解決につながる検証を行うこととしている。グループワークにおいては、課題設定と議論を行うことにより、異なる分野の学問を学ぶ必要性を感じることで、仮説・分析・検証・実証というプロセスや、異なる考え方に接することができると言える。

<sup>5</sup> [https://www.shidairen.or.jp/topics\\_details/id=4135](https://www.shidairen.or.jp/topics_details/id=4135)、2024.3.17

<sup>6</sup> 寺田徹（2014）「学融合と農村計画教育－若手研究者の立場から－」『農村計画学会誌』33巻2号 p. 118-121

<sup>7</sup> <https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/archives/1053>、九州大学アクティブラーニング教室「グループ学習の導入とジグソー法」、2018.6.1

# 学融合ゼミナール I・II 「研究成果」－調査 (R6・2・13)

クロスディシプリン教育チーム

【学科名】(仏教学科)

## 1 授業設計

仏教学科の学融合ゼミナール I・II では、クロスディシプリン教育チームによる「令和5年度学融合ゼミナール」の教育目標を踏まえ、履修対象学生には仏教学科で学修する意義をそれぞれ3つのアプローチをコンセプトに実施した。同様のコンセプトでの意図は、学修の連続性の中にも異なる視点を加えることである。学融合ゼミナール I・II における3つのアプローチは、意味的(歴史的)(5回)、身体感覚的(5回・他学科)、視覚的(4回)である。

学融合ゼミナール I、1、意味的(歴史的)アプローチとは、仏教学科で学ぶ意義を再確認すること(自校史教育、日本仏教と設立四宗派及び地域など)。2、身体感覚的アプローチとは、他学科の学びで自己の知的領域を拡充すること(ひと、地域、まちをテーマに)。3、視覚的アプローチとは、教材の活用方法により知的好奇心を引き出すこと(TOPPAN・ETOKI システムを導入して『一遍聖絵』第7巻「市屋道場の場面」を教材に実施)。

学融合ゼミナール II、1、意味的(歴史的)アプローチとは、仏教伝来から現代に至る歴史的意義について学ぶこと。2、身体感覚的アプローチとは、他領域の学びで自己の知的領域を拡充すること。3、視覚的アプローチとは、美術や文化など視覚を通じた学びから思考すること。

以上のコンセプトを踏まえて講義を展開した。学融合ゼミナール I で得た理論を学融合ゼミナール II ではグローバルな視点を得られるように工夫した展開を心がけた。

全ての講義資料や質疑応答などの情報発信は主として UR-Note を活用した。

## 2 コーディネータの役割

- 1, 学融合ゼミナール I・II のカリキュラムデザイン
- 2, 学融合ゼミナール I・II 講義資料の配信及び採点
- 3, 担当教員との連携協力
- 4, cross 学科担当教員との連携協力
- 5, 学融合ゼミナール I・II 受講生へ UR-Note から情報発信
- 6, 学融合ゼミナール I・II 受講生の成績管理及び履修指導

## 3 cross 先学科との連携による成果

- 1, 他学科教員との関わりの中で、新たな講義方法(映像作成、収録時間など)や思考法(地域のとらえ方など)を得ることができた。
- 2, 昨年同様に、他学科学生からのコメントには、所属学科の学生に対する講義で使用している PowerPoint のデザインや表現方法など、気づくことのできない点について指摘があり、個人的にも学びの多い機会となった。
- 3, 他学科の学生からは、仏教系大学でありながら、仏教を学ぶ機会が少ないというコメントが多数寄せられ、今後の講義展開や学内行事との関連を意識した講義設計の参考にしたい。

#### 4 クロスディシプリン教育に関する感想

学融合ゼミナールⅠ・Ⅱを開講し、改めてクロスディシプリン教育の理念は、大変有効なものだと再認識した。しかし、対象となる受講生に対しては、現行のカリキュラム上、Ⅰ類とⅡ類を接続する理論知に比重を置いた内容にせざるを得なかった気がする。それでも、縦・横パートの学びを得られることは受講生にとって意義深く、今後、一層工夫した展開を心がけたい。

#### 5 問題点等があれば記述してください

昨年度同様、学融合ゼミは、全学科の学生と共通した「課題」について学修できる講義と期待している学生のコメントがある。学生自身の興味や関心を引き出すのも学融合教育の特徴だと考える。今後、学融合ゼミの講義形態や方法などを議論すべきかと思う。(この点に関しては、次年度、新たな展開が予定されているため、更なる期待がもてる。)

# 学融合ゼミナール I・II 「研究成果」－調査 (R6・2・13)

クロスディシプリン教育チーム

【学科名】(人間科学科)

## 1 授業設計

学融合ゼミナール I、II ともに各回の授業の内容を簡潔にまとめたワークシートを学生に毎回記入させ、総括ディスカッションとレポートの作成において活用するようにした。ワークシートに各回の授業ででてきたキーワードを控えるように指示し、キーワードが各回の授業とどのように関連付けられるかをディスカッションすることを求めた。ディスカッションのチームは、レポートのテーマごとに編成しチームごとに着席するように指示した。

## 2 コーディネータの役割

学融合ゼミナール I、II でとりあげるテーマ、教員について授業のデザインを考えた。各回の授業を要約したワークシートを提出させ、採点をした。ディスカッションのパートではコメンテーターとして発言した。レポートの採点を行い、各回の担当教員から提出された評価のとりまとめを行った。

## 3 cross 先学科との連携による成果

学融合ゼミナール II については 5 回の授業において、3 つのテーマを 2 回分の授業にわたり論じた。いずれのテーマも人間科学科の授業では触れられることの少ない政策課題についてとりあげた。また、各テーマについて公共政策学科の教員と人間科学科の教員がそれぞれ 1 回の授業を担当した。こうした取り組みによって学生はクロスディシプリン教育の意義について理解を深めることができたと感じている。

## 4 クロスディシプリン教育に関する感想

学融合ゼミナール II については 2 回で 1 テーマを論じる構成にしたが、学融合ゼミナール I では従来通り 1 回で 1 テーマについて毎回異なる教員が論じる形式であった。前者のほうが、クロスディシプリン教育の意義について学生が実感できるはずである。

## 5 問題点等があれば記述してください

2 年次の春学期においては自学科のディシプリンを学生が十分に把握していないため、他学科のディシプリンとの相違について学生が理解し言語化することが困難であると感じた。学融合ゼミナール II では着席の場所を事前に UR-note で指示したが、場所がわからない学生への指示や遅刻欠席、課題未提出のため着席場所が指示されていない学生への対応に時間をとられた。

# 学融合ゼミナール I・II 「研究成果」－調査 (R6・2・13)

クロスディシプリン教育チーム

【学科名】(社会福祉学科)

## 1 授業設計

学融合 I・II とも、両学科学生交流の時間を増やした。学生の反応は、多数が交流を喜ぶ意見が多かったが、交流への疑問や煩わしさの意見も少数あった。

講義・学生の考察・意見交換・解説・振り返り、という参加型授業計画により実施したゼミ I の主担当であるが、貧困と多文化共生について学際的に共通点を探りながら進めている。特性が大きく異なる学科同士ではあるが、どうすればいいのかも実践的に考える機会となっている。

## 2 コーディネータの役割

他学科のコーディネータとメールで打ち合わせをしながら進めている。複数教員担当授業につき、教員間の情報共有や作業分担も不可欠であるが、その濃度は教員メンバーによって異なる。各教員メンバーが負担なく、できるだけ自由にできるよう調整した。

## 3 cross 先学科との連携による成果

社会福祉学科は社会福祉を素材にした文学を授業に取り入れ、日本文学科は言語学を社会問題に結ぶ授業を行い、学生にとっても新しい視野が得られたのではないかと。2年目はだいぶ洗練されてきており、学生は他学科と交流があること、他学科の教員の講義を聴けてそれなりの満足は得ている感触がある。

## 4 クロスディシプリン教育に関する感想

融合というよりも、どちらかという、学際や学交流といった側面が強く、普段知らないディシプリンからの角度で学ぶ機会となっている。

本来、学生にとって、異なる学問分野との交流は、面白く刺激的だと思うが、正反対の学生反応が生じることは、殻に閉じこもり交流を断ったコロナ禍ゆえの課題なのか、学融合プログラムの教員や組織体制課題なのだろうか。

## 5 問題点等があれば記述してください

本来は毎回同じ教室で2学科の学生がいて進めるのが良い。その方が交流も進む。昨年度からの変更は、学期が始まる前に調整しないとシラバスに反映できないし、学生は混乱するように思われる。

# 学融合ゼミナール I・II 「研究成果」－調査 (R6・2・13)

クロスディシプリン教育チーム

【学科名】(人文学科)

## 1 授業設計

- ・学融合ゼミナールIでは、人文学がもとより備えている学際性を活かし、公共政策の研究方法を多彩な方向から導入することによって、学生がさらに広いパースペクティブを獲得できることを目標として授業を設計した。
- ・学融合ゼミナールIIでは、学生が現代社会における文化的多様性と公共性について理解し、社会における課題を発見し、その課題に対する解決力を身につけることを目標として、授業の設計を行った。
- ・学融合ゼミナールI、IIともに、期末プレゼンテーションでは、以下の内容で第2回目から第10回目までの授業内容を振り返り、各グループ(4名程度)で関心を持ったテーマについて話し合い、さらに深く調べ、発表を行うことを課題とした。

プレゼンテーションの内容：

1. 問題提起 (各回の授業で関心をいただいたこと、疑問に思ったことをいくつか挙げ、その関連性を考える)
2. 現状把握 (何がそれらに共通の問題であるのか探り、授業内容や自分たちで調べたことから現状を把握する)
3. 問題への積極的な対応や解決の方法の提案 (どのような前向きで積極的な対応が可能か、どのように解決できるのか)
4. 結論 (問題⇒提案のまとめ)

## 2 コーディネータの役割

- ・第1回目のイントロダクションパートの授業担当、第11回目から第14回目の授業でのグループ発表準備やグループ発表等の学生対応を行った。
- ・人文学科と公共政策学科の教員のシラバス内容の確認や講義日についての日程調整を公共政策学科のコーディネータと行った。
- ・各教員の授業内容を把握するため、全てのオムニバス授業に同席した。

## 3 cross 先学科との連携による成果

迅速に連絡が取れるよう心掛け、公共政策学科のコーディネータの先生とはシラバス内容や各授業担当者の日程調整、振り返りレポートの採点方法などについて、適切なコミュニケーションを取りながら業務を進めることができた。

## 4 クロスディシプリン教育に関する感想

期末発表では、第2回目から第10回目までの授業内容を振り返り、各グループで関心を持ったテーマについて、さらに深く調べ、発表を行うことを課題とした。期末発表を通じ、学生が他学科の学びにも見識を広げることができていることを実感した。

また、2年生に比べ、3年生の発表は堂々として分かりやすい発表内容になっており、1年



間の間に見違えるほど成長していることが見受けられた。

**5 問題点等があれば記述してください**

来年度の学融合ゼミナールⅡでは、各学生が興味や関心に合わせて他学科の授業を選択できるため、学生たちのさらなる成長が楽しみです。

# 学融合ゼミナールⅠ・Ⅱ「研究成果」－調査（R6・2・13）

クロスディシプリン教育チーム

【学科名】（日本文学科）

## 1 授業設計

○学融合ゼミナールⅠ（日本文学科）

第1回～5回、11回～14回は学科パート、第6回～10回は横断パート（社会福祉学科）（うち第10回は社会福祉学科との混合クラス）で実施した。それぞれの回の授業テーマは以下のとおり。

- 第1回 多文化共生社会と日本語教育
- 第2回 地域における日本語教育
- 第3回 外国につながる子どもへの日本語教育
- 第4回 授業：留学生への日本語教育
- 第5回 オールドカマー／ニューカマーと日本語教育
- 第6回 さまざまな貧困のかたち、貧困とは何か
- 第7回 子どもと貧困
- 第8回 授業：女性・ひとり親と貧困
- 第9回 野宿者と貧困
- 第10回 地域支援のあり方
- 第11回 授業の内容について復習する。（2時間）
- 第12回 アカデミック・エッセーに向けて
- 第13回 プレゼンテーション（1）
- 第14回 プレゼンテーション（2）

○学融合ゼミナールⅡ（日本文学科）

- 第1回に自学科の授業（オリエンテーションおよび講義）
- 第2回に社会福祉×日本文学科混合のグループワーク（交流、自学科紹介）
- 第3～11回の学科パート、横断パート
- 第12・13回目で再度学科混合のグループワーク（プレゼンテーション）
- 第14回目は自学科の授業（アカデミックエッセイ作成）

## 2 コーディネータの役割

学科内でのⅠとⅡの連続性・一貫性が保てるように教員同士の連携を図り、内容や方法に関する調整を行った。あわせて、クロス先である社会福祉学科のコーディネータとも連携を図り、共通テーマ、本質性を揃えることで一つの授業として歪な構造のものにならないよう調整を行った。

## 3 cross 先学科との連携による成果

学生のリフレクションシートから、学科合同のグループワークを通して、互いの学科（社会福祉学科・日本文学科）の普段の学び方の違いや、学融合ゼミナールで他学科と同じ講義を受けても物事に対する視点の持ち方が違うことなどに驚きを感じている様子が多く書かれてい

た。特に、混合クラスにおける学びや気づきが多かったというコメントが多かったことから、今年度試験的に導入した混合クラスについては一定の成果があったことが認められる。

#### 4 クロスディシプリン教育に関する感想

- ・講義自体もさることながら、授業の活動の中でも特に異なる学科の学生とのグループワークに学生の満足感に関する効果があったと感じる。
- ・大変面白い試みだと思ったが、一方で、率直に言って、教員の負担もかなりあった。他学科の学生に対して行う授業はその対象学生においておのずとクロスディシプリンになるが、自学科の学生に対して行う内容を改めてクロスディシプリンな内容で、というのはなかなかの負担があり、また専門内容によってもやりやすさがだいぶ異なる（担当しやすさに関わる）と感じた。

#### 5 問題点等があれば記述してください

- ・学期の途中で新たなプランについてのアナウンスする機会があったが、自身がよく理解ができない状態で学生にアナウンスしなければならないのは難しかった。コーディネータはコーディネータとして必要であると思いますが、それとはまた別に学融合ゼミナールに関して相談できる専用窓口（担当者？担当グループ？）があるとよい。
- ・学科の学生の特性上、他者と関わる、発表するといった自己表現が苦手な学生が多く、主体的な学びへ展開させるのが難しかった。そのせいか、単位を落とす学生も少なからずおり、卒業までの履修に不安がある。

# 学融合ゼミナールⅠ・Ⅱ「研究成果」－調査（R6・2・13）

クロスディシプリン教育チーム

【学科名】（歴史学科）

## 1 授業設計

学融合ゼミナールⅠの授業の内容、担当者については、昨年度のものを踏襲した。学融合ゼミナールⅡについては「現代社会」をキーワードとして、内容・担当者などを決定した。昨年度からの変更点として、授業内においてグループワークを積極的に行うようにした。一方的な知識の伝達にとどまることなく、主体性をもって授業に取り組むことを目的としたものだが、概ねそれは達成されたと考える。

## 2 コーディネータの役割

昨年度と同じく、授業設計、授業運営の中心を担った。学融合ゼミナールⅠについては、初回の授業時にこの授業の目的・内容などを詳細に説明した。学融合ゼミナールⅡについては、毎回の授業に出席し、講義担当の先生方のフォローを行った。

## 3 cross 先学科との連携による成果

昨年度と同じく、地域創生学科との cross であった。次年度の授業編成を進めるなかでコーディネータ間にて数度の打ち合わせを行い、しっかりとした授業計画を立てることができた。また公共政策学科の先生方にも横断パートの1回分をご担当いただいた。いずれも本学科のカリキュラムとして不足している内容を講義して頂き、学生たちにとって大きな刺激を与えるものであったと考える。

## 4 クロスディシプリン教育に関する感想

上記したように、学生たちにとっては普段の学科の科目では学ぶことのない内容で大いに刺激を受けたと思われる。またグループワークを取り入れたことで、本授業により主体的に取り組む姿勢が見られ、その成果は学期末のプレゼンテーションやアカデミックエッセーに反映されたものとする。そのなかでも優秀者については「学融合サミット」にて口頭発表も行っている。全体として、本学が目指しているクロスディシプリン教育の目的を達成することができたと思う。

## 5 問題点等があれば記述してください

# 学融合ゼミナール I・II 「研究成果」－調査 (R6・2・13)

クロスディシプリン教育チーム

【学科名】(表現文化学科)

## 1 授業設計

「街文化の融合」では、街から生まれる文化を多角的に分析した。著名人と街の関わりという視点から街と文化を表出し、多様な方面から事象を捉える方法を習得した。また仏教学部と連携することで、適宜仏教と芸術の関係性も紐解いていった。「表現から生まれる信仰」といった現在の推し文化から、「信仰から生まれる表現」といった宗教画についても解説した。

## 2 コーディネータの役割

仏教と表現といった異なるジャンルを繋げることがコーディネータの役割である。両学科に授業を行うことから、内容を平易にすることを心がけている。深く学習していくことよりも、学生自らが学習をしていくキッカケを提供することが最重要である。学生にとって未知のジャンルへの道先案内人のような存在であり、授業で扱う分野を魅力的なものとしてプレゼンテーションする能力も問われている。

## 3 cross 先学科との連携による成果

表現文化学科の授業ではどこの町にも寺院があることから、仏教においても街文化が重要であるといったことを示すことができた。  
仏教学科の授業からは、我々の生活に現在も密接に関わっている仏教を示すことができた。この2つの学びから学生は、多面的なものの捉え方を得られたのではないかと考えている。

## 4 クロスディシプリン教育に関する感想

当初は教育の方向性に不安があったが、年を重ねるごとにノウハウを蓄積できた。しかし興味を示す学生とそうではない学生の熱量の差がかなりあり、そこを如何様にしていくかが今後の課題である。

## 5 問題点等があれば記述してください

# 学融合ゼミナールⅠ・Ⅱ「研究成果」－調査（R6・2・13）

クロスディシプリン教育チーム

【学科名】（公共政策学科）

## 1 授業設計

学融合ゼミナールⅠでは「学融合の視点から『公共』について考える」をテーマに、講義パートでは、公共政策学科4人、人文学科5人の教員がそれぞれの専門分野からの講義を行った。学生たちはその知見をふまえて、今後どのような学びを行いたいのか、具体的には3Qで実施するフィールドワークでどのように活かしていきたいのか、というテーマでアカデミックエッセイを作成し、そのアカデミックエッセイをもとに、フィールドワークのチームでのグループワークを行い、発表会を実施した。

学融合ゼミナールⅡでは、「現代社会の『公共』（公共性)について考える」をテーマに、講義パートでは、公共政策学科4人、人間科学科5人の教員がそれぞれの専門分野からの講義を行った。学生たちはその知見をふまえて、今後どのような学びを行いたいのか、具体的には3Qで実施するフィールドワークや今後取り組む卒業研究にどのように活かしていきたいのか、というテーマでアカデミックエッセイを作成し、そのアカデミックエッセイをもとに、専門ゼミナールごとのグループワークを行い、発表会を実施した。

## 2 コーディネータの役割

公共政策学科は、「学融合ゼミナールⅠ」のクロス先が人文学科、「学融合ゼミナールⅡ」のクロス先が人間科学科となるので、前年度中にそれぞれの学科と、講義パート部分での出講する教員、講義のテーマ等の調整を行った。授業期間中は、授業回ごとのコミュニケーションシートの採点結果の報告等の連絡を行った。

コーディネータは毎回講義に参加し（他学科に出講の際には代理を依頼）、出欠管理と教室管理を行い、講義の前と後で学生への説明・連絡を行った。

成績評価では、コミュニケーションシート、アカデミックエッセイ、プレゼンテーションの採点管理、全体的な成績評価の原案作成と学科への共有・最終的な成績入力を行った。今年度はグループワークを重視することになったので、グループワークに積極的に参加していることも評価対象とし、教室内を巡回して適宜指導を行った。

以上、具体的な作業内容を挙げたが、学融合ゼミナールⅠと学融合ゼミナールⅡの発展的違いを意識し、講義をお願いする教員に説明するとともに、受講する学生に主体的な学びができるようにサポートした。

## 3 cross 先学科との連携による成果

人文学科との連携では、哲学、宗教学、文化人類学、教育社会学、言語学から「公共」についての見解を講義いただいた。「公共とは何か？」という唯一の解がない問題設定とはなるが、それぞれの専門分野で「公共」の領域があることを確認でき、「公共について考える」上でさまざまな視点や知識を得ることができた。

人間科学科との連携では、社会学・心理学の研究の視点・方法を学ぶことによって、学生が今後研究の対象とする「公共」に関する課題解決のために必要となる多面的・重層的な思考を修得する意欲関心を高めることができた。

#### 4 クロスディシプリン教育に関する感想

「学融合ゼミナールⅡ」では、前年度に学生たちが「学融合ゼミナールⅠ」を履修していることもあり、また彼らが3年生となり、専門ゼミナールに所属し、卒業研究を意識した学びに入ったこともあり、グループワークでは積極的な議論ができていた。また、普段他学科の授業を受講できないカリキュラムであるため、学生たちが他学科の講義を受講できる大変貴重な機会となった。特に心理学の学びの一端に触れたことは、その面白さと同時に難しさもわかり、刺激を受けた様子が見られた。

公共政策分野自体が学際的であるため、学生たちの多くは学融合ゼミナールを通じて、さまざまな学びができることを肯定的に捉えることができていた。

#### 5 問題点等があれば記述してください

前年度の反省を生かし、今年度は「学融合ゼミナール」の意義を教員側が積極的に発信するようにしたこともあり、多くの学生はその意義を理解しているようだった。特に3年生（学融合ゼミナールⅡ）は専門ゼミナールに所属し、自分の関心領域が明確になったこともあり、その意義を理解しているように思われ、グループワークでも積極的な議論ができていた。ただ、2年生（学融合ゼミナールⅠ）については春学期開講ということで学科Ⅱ類科目の本格的な履修が始まる時期と重なるため、まだ学科の学びも始めたばかりで自分の関心領域も定まらない中で「学融合ゼミナール」を学ぶことに混乱している様子も一部見られた。次年度は学科パートの部分で、公共政策学科の中心的な学びを、限られた授業回の中でも一定の理解ができるように工夫していきたい。



大正大学